

武勇を學ひ勇性未練の舉動なすまじと兄の名ごとと出さねと縁返く異見を爲つ、歸陣なさんとする處へ將軍の御本陣より御使者來り明日は天王寺口御先鋒仕つるへき旨仰を蒙りしかは忠朝大いに打欣喜秋田城介眞田河内守松平石見守六郷兵庫頭添野采女正植村主膳正須賀攝津守等へも直に其段を知らせ其後小野勘解由へも其由具に物語けるに勘解由は明日の合戦は三の條目有其一は討死二は壹番槍三は高野山隱遁のとなりと聞忠朝只點頭しのみにて勅言を居たりける明れば五月七日岡山筋天王寺口の先鋒未明より漸次に線出し兩御所の御旗を待奉つりに長辰の下一刻に及たり出雲守忠朝は黒糸織の鎧に鹿の角打たる兜を着今日を最期と思ひ詰し事成は忍ひの緒を結ひ切餘は切て是を捨栗毛の太く逞しき馬に打乗彼の鐵の棒を引提白地に立葵の旗三流銀の三蓋笠の馬鞍を押立させ六日の夜中惣軍より遙か先立天王寺口へと押出し戦ひ過しと待掛たり先鋒の軍目付安藤帶刀之金の打板黒き折掛の指物よて乗出來り忠朝の陣取餘り出過たりと云を同忠朝の備は是より一寸も退き難し他の陣を進すべしと返答せしは帶刀は道理なり然らば其通取計はんと挨拶あして行過たり此處の大坂方は茶臼山に對する左備へ天王寺南門筋にして毛利筑前守勝永及其子式部少輔永俊筋邊の旗鳥毛輪邊の馬印を押立續て淺井周防守武田永翁山本左兵衛勘解由等なり敵味方隻方白眼合て暫時時を移しが第一番に出雲守味方を放れて敵陣に進み寄鐵炮を打掛開の聲を揚て攻掛りしかば越前勢を見て直に茶臼山成眞田の陣へ打向ふに忠朝に附添たる兵士の小勢成を危み郎黨勘解由は忠朝の前に進出何とて斯様なる小勢にて味方を放れて進み給ふや如何と思召切はとて斯様に無謀の軍はせざるものなりと心を盡して諫言しかば

出雲守は耳にも入らず左右我意に隨ふへし掛れやくと喚き叫んで下知あすにぞ勘解由は何と詮方なく假令主君の憤怒を蒙る其諫言されは臣たる者の道にあらす心を決し又もや繼取絶り如何に主君の仰成其餘りと云は言甲斐なし嘴青き大將成と目言しり且辱しめて止る處に加藤忠左衛門も馳來り是は物に狂せ給ふにや左右は味方を待合せ機會を見て掛り給へど臆そる色なく諫言しかば忠朝少しも聞入らず嘴青き大將とて能も主人を罵りたり乞我手練を見せ吳んど郎等も持せし彼の鐵の棒を取より早く打んとすれば勘解由は颯と押開き然ば仰に及へき只今討死仕つり眞土の魁けやさんと言ながら眞一文字に乗出せば忠朝愈々怒り寄り側なる加藤忠左衛門を微塵になれと打ければ加藤も是を除たれ其何かは以て堪るへき馬より下へ打落されしが是も同じく立上り我も討死致すべしと疾くも再び馬に打乗是も先鋒へ駈行けり忠朝は彼等二人に出移れ我が旗本を見渡せば斜に陣を扣へつ、皆々馬をば引付居し倍々怒憤を顯して汝等馬を引寄しと進ん爲かど罵りながら頻りに下知を傳ふれば後に扣へし若者共我劣らじと駈出し大坂方毛利豊前守の備へ無二無三に鐵砲を打掛たり越前守は是を見て四千餘騎を杉先に備同しく矢玉を飛して戦ふ中煙りの下より是は本陣出雲守の家臣小野勘解由向く加藤忠左衛門なりと名乗毛利の陣へ面も振らず突て入ば毛利の陣より窪田傳十郎三宅軍兵衛掛合せ雙方請つ流しつ戦ふ間に又もや毛利方より動と打出したる鐵砲に先へ進みし忠朝の兵卒七十餘人將基倒しに討倒され後より駈出し小性組足輕等も思はず二三十間引退し忠朝の旗本近く崩立るに豊前守は馬鬣を揚四千の兵を二手に分左右より忠朝の旗本を襲來り大將を討取んと攻立る時窪田傳十郎大原惣右工門押田左馬允山

本忠左工門原田四郎兵工柳原加藤等備を離れ鎧を入んと呼ばれは小鹿主馬之助は紫の母衣を
掛河原毛の馬に打乘真先に塵を振立鎧迫合は未早し猶鐵砲にて打縮めよと四方を下知し迄
寄は敵味方槍袋を造り映き叫んで戦ふたり

○本多忠朝奮戦討死の事 本多の家臣等(御感状を賜る事

斯て小鹿主馬之助は二間一尺の鎧をりうく打振當るを幸ひ難立く恰も傍若無人の勇
戦に鎌田大原山本原田柳原等以下の面々劣と負じと突刺るを關東方大敗走し忠朝の相
備へ秋田城介植松主膳正松下石見守六郷兵庫頭淺野采女正須賀備津守等も備を立兼直に越
前勢の右備へ雲懸掛るは忠朝の右備真田河内守兄弟も是が爲に逐崩さる忠朝は是を見て大
に怒り百里と號けたる駿馬に鞭打唯一騎例の鐵の棒を引提敵中へ乗入當るを幸ひ打倒すを
見て小野勘解由が縁忠左衛門を始の儘は郎黨廿餘人隨從するのみにて後備は續く兵のなき
に心元なく思しにや大屋作左衛門唯一騎真勢地に跡を慕ひて驅出せし處に甘間餘りも隔り
て小野勘解由は大勢に取籠られ既又危く見へければ忠朝は大音聲に勘解由討すな續けや者
共と下知せしにぞ歩空軍くも馳付て勘解由を助け出さんと右又當り左りを討む敵は目
も餘る大軍をれば終におよと叶はず勘解由も四角八面に奮戦し敵多く討取討死せしは最哀
成事共なり此時勘解由を救助んとせし歩卒も五人は即時討れ討人へ傷を負墮跟ながら敵
の首を下て馳歸れば忠朝は齒嚙をなし鐵の棒を打振く本多出雲守忠朝是に在返せや戻せ
と大音聲よ呼る聲を聞付て毛利勢の其中より中川彌左衛門南森傳左衛門徳永甚右衛門等皆
な屈竟の勇士共七八騎忠朝を目懸て打て蒐るにぞ忠朝は大喝一聲喚くと見えしが急逃に前

へ進みし二人の武者に馬踏共に打縮め左右よ来るを打拂ひ打倒し忽ち五六騎打殺し逃行敵
の鎧を奪ひ取右に鎧を抱込左に鐵の棒を打廻し人馬の嫌ひなく縦横に突立打居七八度敵陣
を駆散入阿修羅王の荒たる如く馳廻りければ流石の毛利勢も此勢ひは避易おし四方へ發
と散乱す此時大坂勢の中より紺地の陣羽織着たる武者十数箇を携へ凡三間も隔りし所へ狙
寄捕と打放せしに其玉過失す忠朝の膺の上に血煙り立て打込れ共忠朝少も疲ます直に馬
より飛下撥援手も見せず彼の敵を真甲かけて切放し再び馬に飛乗や否や猶も鐵の棒と刀を
左右に打振く大坂勢を難立ければ彌々毛利勢は亂れ四方八方へ散亂せるは忠朝遁さじ
と追駆既に城中へ乗入んとせし所其身は玉疵のみ成す數刻の戦ひに鎧疵都合廿餘ヶ所に及
ひければ如何に猛き武士と雖も身體漸次に疲労自暈み手足も自由成さる折柄小溝を飛越ん
とせし時過つて落馬せしを見て大坂勢一度に取て返し大將忠朝を討取んと號ひ蒐るを大屋
作左工一馳來り主人の首級を取せじと前を難後を拂ひ苦戦し乍ら忠朝の屍の上に跨り馳ひ
來る敵を防禦けれ共多勢に無勢叶ひ難く終に討死なしたりけり然其後陣の者は是を知す各
自主人の猛勇に勵されて大敵の中を切抜く城際迄果込しが忠朝討死と聞豫て期したると
ながら今更の様と思はれて何も力を落し猶豫しが然とて止まる可にあらざれば各自士卒を
纏本の陣に歸らんとする所に忠朝作左衛門の主従折重あり骸のみ在て首は敵手に捕れしと
覺ければ各自悲憤遣方なく然と大屋作左衛門は其身死しと雖も左手に忠朝の屍を掴み主人
を守護せし舉動は後の世迄も人々感歎したりける又忠朝の出陣前誓詞を捧て討死を約した
る臼杵七郎兵衛石川半彌中根權兵衛山崎半右衛門大原長五郎村越茂兵衛青山五左衛門土橋

加兵衛土屋太助八稻毛一郎兵衛等を始其他小姓馬廻の者其忠朝討死と聞と等しく思ひく
 に奮戦し敵夥多討取て全じ枕又討死せし勇しくも又哀なり三宅軍兵衛大原惣右衛門柳田左
 馬丸山木忠右衛門向坂若狭窪田傳十郎石川金彌近藤五郎右衛門小森勘左衛門門田次太次杉
 浦墨右工門河崎市左工門内藤五郎作半佐美小右工門等は何れも深傷を蒙りながらも主人の
 葬ひ合戦ありと粉骨碎身し當るに任て勇戦せし故忠朝の手に討取たる首級七十餘級軍の
 御本陣へ差出せしかば御凱陣の後是等の軍功を本多美濃守に諫方仰付られ就中窪田大原柳
 田山本の四人は鎧術の手練を賞せられ小鹿主馬は士卒の號令能行届たりとて都合五人は兩
 御所より御感狀を賜りける是より先に毛利勢と戦ひを始めし時村平丹波守康水軍使を馳て
 忠朝を助んと言出しに忠朝討死と覺悟に候へは其儀及はず併御芳志の段添けなく此上
 は討死の後を左右御委頼申へしと言捨其儘深く進て討死せり丹波守も忠朝に續激軍に馳入
 自身鎧を破て彼方此方と突廻り名有武士を討取んと八方を駆巡勇戦し敵多く討取たれ其
 身も深手を負最危く見えける處に従者近藤兵右工門馳來主人の危急を救ひて歸陣成けるが
 此戦争に家人八九人も討死す内藤帶刀忠興も味方の軍勢迫加る、と見るより從者五騎歩卒
 三人よて毛利勢に突入く敵兵九人相手にして四人を突伏倚も進んで殘兵を遁すまじと
 思しが敵の散乱せしに深くも逐す家士と命して突伏たる首を取御本陣に贈りければ兩御所
 御感賞淺からず帶刀今年廿二歳にて父祖に劣ぬ武功なりと世人皆々稱美せり祖父彌次右衛
 門家長は關ヶ原合戦の前に伏見の役に討死し父左馬川政長も三方ヶ原の合戦も僅十六歳よ
 て高名せり斯の如く父祖代々武功を繁ねしかば御凱旋の後今度の武功により父が領地の外

に二萬石加増有しとぞ

○小笠原秀政父子討死の事

昨六日小笠原兵部大夫秀政は榊原遠江守と共に若江口に向ひしが木村長門守の兵は既に井
 伊掃部頭の兵と合戦最中故榊原勢は長門守の左軍木村主計限が固めし若田村の備へうち宛
 らんとするに軍自付藤田能登頭頼に諫先今に井伊勢追崩さるへし其際に至交代して決戦な
 さんには勝利疑ひなかるへしとの異見により榊原の先手も烈く進まされは小笠原勢も藤田
 が異見を用ひて躊躇ける所に又井伊勢は毛利勢の陣營へ突入散々に駆立ければ敵兵這々に
 敗走するを見て榊原勢漸次く、驅出軍功を立んものと思ひけるが早城中へ逃込ければ小
 笠原勢は進むに説なく如何も手を空くせしとを口惜く思ひ今七日には是非花々しき戦ひ
 して昨日の塙原を雪がんと決しける殊に嫡子信濃守忠脩は今度居城松本に殘りて守護べし
 どのとなりしを竊に出陣なし兩將軍の御答めはあらされ共御軍令に違背せし故父秀政より
 差止て拜謁を免れす因て信濃守は其罪を謝せんか爲今度こそ討死なさんものと思ひ定めし
 故大坂方の毛利豊前守勝永は天王寺の役に越前勢已に茶臼山の眞田の陣を追崩し城中へ攻
 入たることを知すして大御所の御旗本へ無二無三ノ亂入し諸卒を勵まし此所を専途と勇を奮
 ん其中にも大坂方武田永翁は衆を援で進ければ豊前守より使者を以都合に寄備を繰替へ間
 貴殿には一先御引退さ有へしと言せけれ共永翁は今猶を合せる最中成は此勝負を決せし
 上御指揮に隨はんと返答し本多山雲守忠朝の相備の秋田城助植村主膳松下石見守六郷兵庫
 頭一野采女正須賀攝津守等の陣々を打破り己に大御所御の本陣近く進みし機本多忠朝の主

從烈しき奮戦に毛利勢を切崩し城際迄追返せし時二陣の小笠原兵部大輔其嫡子信濃守同六
 學助保科肥後守内藤帶刀松平安房守全甲斐守等丹波守牧野駿河守水谷伊勢守酒井右衛門尉
 神原 遠江守稻垣平右衛門等諸將一等に闘の聲を揚て大坂方大野修理亮淺井周防守武田永
 翁等の陣へ面も振す馳込て矢鋒より火花を散れ算を乱して決戦す中にも小笠原兵部大輔嫡
 子信濃守二男大學助等は殊更衆を拔出て武田永翁の備に突て斃るに永翁も此處を破られじ
 と防禦に力を盡せしかと終に其詮なく東門の方へと逃入ければ兵部大輔は勝も乘大野修理
 亮へ突て掛るに大坂方毛利式部少輔斯と見るより結城壘之助橋本十兵衛を兵先に進小笠原
 勢の横合より突入ば兵部大輔は馬に鞭うち鎗を奮て當るに任せ數十人突落し東西に駆破り
 勇を顯し、が終に大勢に取圍れ重手薄手數十ヶ所負て馬上にも堪兼終に倒と落ければ
 敵兵奔て其首級を捕んとする所を心服の郎黨駈來て兵部大輔を肩に掛て歸陣せし嫡子信
 濃守も豫て今日を最期と覺悟せしと成ば本多出雲守の後より引續きて群集敵の中へ乘入紛
 骨碎身して戦ひしが此時迄も附添たる郎黨は僅に廿餘騎にて淺野周防守與田采女正福島伊
 豫守吉田 藉允等の勢餘人と挑戰へば士卒の負傷最も多く中にも小笠原主水正征矢半彌
 二木勘右衛門鳴立内膳等は主人と存亡を俱にせんと力戦せしも無勢にして終に大坂勢は打
 れけり信濃守は父の深き負傷を知す且本多出雲守の討死せしをも知ねば斃れ進めど下知を
 爲し身を挿で敵ヶ所の深手を事共せず押進み、驅巡りける程に従兵等も東西に懸隔てら
 れ只一騎深入して大勢に取圍れしとともせず十字に破り巴の字に巡り鎧元より切先迄血
 に染たる大太刀を振閃めかすを家人原四郎兵衛遙に見て馬を駈入主人を救ひ出さんと驅廻

りけれ共終に出逢されは敵の圍を漸々に切抜て元の道に立歸れば金の三圓子の指物差たる
 大將落馬して有けるに若主君にて在やと近寄見れば信濃守故々突れて倒れ居しが幸ひま
 六だ息の絶さりしに四郎兵衛此時四方を見れば敵の襲ん様子もなき故主人の耳に口を寄如
 何よくと呼叫と次弟く、に呼吸亂れて終に敢果なく成ければ四郎兵衛は其屍を脊負て早
 々陣所へ歸りける勝野五太夫は信濃守と同所へ奮戦して疵を蒙り倒しよそ其子傳左衛門當
 の敵を棄て父を救んと引返す時散亂したる味方に向ひ一禮なせしと礎多美縫殿踏止りて士
 卒を下知し敵を逐御し故大坂勢にも信濃守の落馬するを見ながら其首級をも取す散々に引
 退さしとそ因傳左衛門辛ふして父を助て歸陣せしは天晴の忠孝なりとて感賞せざるはな
 りけり

○小笠原大學助忠貞忠戰の事并 忠貞父兄家忠督を繼事

爰も小笠原秀政の二男大學助忠貞は生年十八歳成て此陣中に隨ひしか父兄の討死せしを聞
 て大に歎き悲み此上は假令此に屍を懸す共父兄の敵をかされは子たる香の道も非ずと馬
 に鞭ち乗出すを礎多美縫殿安積覺兵衛は馬の轡を引止免敵勢の纏り天を敵て兵黒に見えけ
 るを指しわれ御覽候へ敵は那の如く勝誇りたる大軍成り味方小勢よて掛合せんと覺束をし
 合戦の勝敗今日に限る可らず一先此處を退きて必勝の良策を考へ其時にこそ思の儘に御父
 兄の怨を晴し給へと諭せと膝せと耳も入す群集敵中へ兵竊地に走入しよそ礎多美安積も
 今は早止まるへきに有されば後と續て走入けるに大學助は前後左右に敵を突立大坂方武士
 大將二人を討取其身も七ヶ所の深手を負ながら猶も馬上の敵に渡合如何したりけん左の證

を踏外し横様に馬より落て既に危く見えけるを澁多美後よ駈り來りて馬上の敵を落突し大學助を助けしが最前落馬せし時馬は何地へ行たりけん行方知すに成し時安積も大學助を心元なく思ひ後に張續きて是も馬上の敵を討取共馬を奪取て大學助を乗し處へ家士從卒等漸次馳來れば澁多美安積は大に悦び大學助を撫恤つゝ引返ける兩御所にも兵部大輔信濃守及ひ出雲守等の屍を興し乗御本陣前を過けるを御覽有て叮呼忠臣なる哉勇なる哉とて御涙を流させられ御哀歎最も深かりけり此時水谷伊勢守の家老水谷太郎右衛門も味方の崩るゝを見て敵中へ馳入討死せり兩御所は別て小笠原大學助の忠孝深く且勇猛威を御感有て父兄の討しを憐ませ給ひ御凱陣の後大學助に父の家督を繼せられ此度の軍功授群成を以て右近太夫に任せられしは此忠貞の事成けり

○將軍家御旗本天王寺口合戦の事 伊井細川兩家の勢武功の事

大坂方毛利豐前守勝永は今日を最期とは定め日頃の勇猛に倍し粉骨碎身して士卒を勵まし奮戦せしより奇手本多出雲守忠朝小笠原兵部大輔秀政同嫡子信濃守忠脩等討死せしかば此手の奇手折衝城際迄乗込しと雖も主人の討死を聞て大に驚き皆々後へ引返しければ毛利豐前守同式部少輔等早今日の合戦は勝たりと大に欣喜此上は大御所の旗本を襲んと攻太鼓を打て烈く士卒に指揮せしかば一旦敗走せし淺井周防守武田永翁其他大野修理亮福島伊豫同兵部少輔木村圭計頭湯淺右近等の軍勢一度取て返し鯨聲を揚て競ひ掛れば秋田城介植荷主膳正松平石見守六郷兵庫頭淺野采女正須賀攝津守の陣々又々亂立右往左往に逐散さるゝを見て二陣の松平安房守松中甲斐守水谷伊勢守酒井左衛門尉柳原遠江守稻垣平右衛門等

の士卒も小笠原勢と俱に躍止まり崩るゝ味方を勵しながら防ぎ戦ひしかど大坂勢は勝り乘じ大坂の岩に當るが如く賊と喚て突入しにぞ關東勢は思はず左右に散乱せり保科其四郎正貞も本多出雲守の隊に加りて出陣せしが忠朝に續て苦戦をかし深手を負しを其家臣保科隼八是を助けて引退く本多大隅守正純は衆に援で先驅し爰を專途と戦へ共勝誇つたる大坂大に逐立ちられ同く敗れて引退く此時兩方より打出す鉄砲の音矢叫の聲は天地を震ひ山谷を動し汗馬の馳遣ふ聲の四方を暗し修羅帝釋の闘場も斯やとばかり思はれたり此時關東勢如何したりけん誤つて大御所の御旗本を目懸て連發に打立ければ諸は此方に裏初有と云程こそあれ御旗本も色めきて騒動大方成されは城兵は是に氣を得て倍々嚴く突て蒐る然共大御所は最前より松林の茂りたる中へ御輿を止られ少も驚かせ給ふ御氣色も亦く斯の如く味方の破れたる時無理に鎮んとすれば愈々騒立動もすれば臆病四に曳れ自餘の者迄散亂する者成る御輿は馬より下て膝の上に鎗を置敵若來らば一時に突落せよと御下知有て尙御身には甲冑をも右給はず在せしか此際安藤帶刃は四方八方へ驅進りて破れ立味方を勵し汗馬に鞭打息を切て立歸り戦ひの景況を書上せんとて御茶辨當に附居居たるね茶道に向ひ某し四方を馳進りて咽頗る渴きたり湯一碗汲てよと云に坊主は上様の御茶碗の外御坐なく誠に氣の毒なりと答しを上様の御茶碗成んには跡を能々洗濯へし疾々と急し立る其聲を遙那方に聞召れ茶道を御叱有て帯刀が咽の乾くと云に何故湯を疾く遣さるるを戰場にて上下の隔か有物か馬鈍めと仰ければ茶道は驚き早速に御茶碗を取出し湯を汲て出しければ帯刀は飲終りて合戦の次第を具に言上し後再度戰場へ馳行けり君臣の間期の如く御隔なきは寛仁大

度の若輩と見出しし者皆感服したりとそ爰に永井右近大夫板倉内膳正も俱に戦場を馳進りて破る、味方を勵しながら駒井右京駒木根長三郎等と一緒に成て奮戦す植村出羽守松平右衛門大夫元但馬守内藤掃部頭等と本多伏波守と俱に御輿の御側を離れず守護して在しか五の字の指物、掃たる御使番四方八方を馳巡りて諸將に御下知を傳ふ阿部左馬助は小高き所に旗を挿立隊伍を總括を司提て敵兵の攻來るを待居し水井右近大夫は散乱したる士卒を勵し返せや者共と叫れ共大坂勢の勝に乗じて急に攻寄る威勢の鋭ければ耳にも入す散乱せり稻加平右衛門は敵の横合より討て蒐り自身真先に進んで兇者を討取其家臣等も三十餘級を得たりける又堀伊賀守は此程より御樹氣を禁りて松平下總守の陣に在しが今度こそ奮戦して先度の恥辱を雪んと有名大將を目懸馳廻りしが兇首を二級を取其家臣等も首七級を得たりける井伊掃部頭藤堂和泉守等は岡山筋に出陣せしが天王寺口の寄手本多出雲守小笠原兵部大輔等の隊伍乱れ旗指物の標ふを見て岡山口より横筋邊に天王寺の方へ士卒を進めしと大野修理亮の隊伍より鉄砲を雨霰の如く打出しも井伊藤堂の兩將事共せず本多小笠原の相備熱田六郷松卜須賀水谷等の敗軍せしを逐立來る毛利豐前守始めの大坂勢討破んと突て掛るに大坂勢は今朝よりの戰爭に身体疲勞し機なれば今は防ぎ暇はんと云氣力もなく散々敗走しけるを井伊藤堂の新手よて採立く後を慕ひて逐行ける故終に總崩れに成けるを豐前守は此處に在返せ戻せと身を操急れと崩れし兵の辭として散々に追立られ城を指てぞ逃入ける毛利も今は力盡城中へ引揚んとするを井伊藤堂の新手は是ぞ此隊の大將豐前守の成ぞ彼將打取と下知の下は勝誇たる兵卒共と面も振ず馳出て已に城際迄攻寄し時天

王寺口の東北に備たる遊軍大坂七組の内青木駿河守眞野豐前守中島式部少輔野々村伊藤守堀田圖書助等は豫て期したると成ば毛利勢と入代り井伊藤堂の横合より新手を以て突入りより岡山口の持場を捨て既此處へ來しが味方の敗軍を見て一趁り驅入先に進みし敵を三人打取奮戦せしが終に討死成たりけり其父帶刀は戰場を乗出し士卒を下知して在けるが家臣何某剛付て若殿には毛利の勢と奮戦有て終に討死成れて候御屍は如何に討ふべきと尋問ければ帶刀は此凶報を聞て心中大に嘆しが軍監の大任最も重ければ悼む氣色を色にも見せず武士の戰場に臨て死せると珍しからず其儘捨てて犬にでも喰せよと云放ち又驅出し陣々へ御下知を傳ける家人共は帶刀の答を聞餘のみに胸潰れ唯茫然として居たりけり其夜帶刀は陣に歸て再度家人を呼出し子息彦四郎の討死せし始終りを委く尋問て天晴なる子息と賞歎したる形状は石流親子の恩愛にて人たる者の平素とは云ぞ最哀成事共なり

○本多能守忠義初陣高名の事并本多永井の家士等向士打の事

爰に井伊勢の旗馬隊の遊軍の爲に逐立られければ旗奉行石川豐前は相役廣瀬左馬に打向ひ我既に年齢七十五歳最早餘命もなかるへし後日の軍に今日の恥辱を雪んと思も許す貴殿は若年なれば一先引退さて又詮方も有ぬへし某しは此處に陥止り討死成ん覺悟なりと云を廣瀬は打開て今日の恥辱を雪ん爲に年の老若を論じ給は其意を得ず貴殿唯一騎踏止らせ此左馬何ぞ阿容く人に顔を合さるべき左ても右くても貴殿と共に生死を同らせんと二人並んで防戦せしが衆寡敵し難く同じ枕に討死せしは最目覺さ勵さあり廣瀬の首は青木駿河守

に属する稻葉伊織の手に得しとぞ夫故に井伊家の旗馬印路傍に捨て有し。井伊の紋茜四半の羅金の蠟取の馬印を八田金十郎菅沼郷右衛門の兩人にて拾取天王寺の丸山迄迎付家老庵原助右衛門に渡り又井伊家の弓頭長坂十左衛門は足輕を手足の如く能使廻し忽地に隊伍を立直して防戦せしに藤堂勢も是を見習ひ漸々隊伍を立直せり。柳原遠江守は昨日の戦争に思はしき軍功のなかりしを恥且味方の敗走するを忿怒て是より一足も退ぞくまじと井伊の隊伍に押並て群集敵を討破り首級七十八級を討取けん。藤田能登守も昨日手を空くしたるを心中に恥居ければ其身二ヶ所迄も手を負ながら奮戦して首廿三級を討取ける。本多美濃守も二百八十餘級の首を得たりしが二男能登守忠義此時十四歳にて初陣なりしが敵の大將大村一右工門は涉合前に在かと思へば後に現れ千變萬化に戦ふ有様は古への牛若丸も斯やと思ふばかりにて流石の大村少く瘡むを付狙ひ耐入太刀の鋭さ大村これを需損じ而勝すんと切落され仰けに搦と倒るゝを押し首を奪つたりける。又松平下總守も首六十餘級を取淺野采女正長重も最初の程は敗走せしが引退て首級級を得たり。細川越中守忠興も岡山表に隊伍を立しが天王寺口の合戦急なりとの報知を聞て岡山の西を押扱て天王寺毘沙門が池の邊まで七組の大坂勢堀田圖書助貞野豊後守野々村伊豫守等に出會しかば雙方より鉄砲を打戦て漸次近く進しが越中守には此度手廻りの勢のみにて急に押寄し事成ば如何にも無勢にて防戦覺束なく思ひしより今回限軍令の法度を許すぞ繼令近侍小性と雖も奮戦成て高名せよやと下知の下より清田七助村岡總殿敷新太郎等の三騎鎗を捨て突て出しが此處如何にも路細くして戦ひ自由成されば敷新太郎は左へ廻りて田の中へ乗入士手に附たる敵兵を

新さんと馬を乗上げれば敵も同く突て出し新太郎は馬に鞭打汝知すや細川越中守の家來殿新太郎とは我等なり太刀風の程見せ呉んと言標討て塊れば扱は内匠の嫡子成かと言も且守方供も火花を散して戦ひしが新太郎や勝りけん難なく首を奪てけり。村岡總殿清田七助佐田監物都筑庄助鳴海丹波等も各自奮戦して此手の敵を追散せば大坂勢は立足もなく敗走するにそ寄手は勝開を揚て柵場迄も追行たり此手の先鋒越前守及び大和伊豫美濃組の者は透穴に天王寺の街口より城門に入て方々を焼立味方勝利の趣き聞えければ大御所には茶臼山へ御陣替有べくとて御近侍のみ御供致し徐々と御出馬有けるが本多上野介松平右衛門六夫秋元但馬守等の三組を御先備とし昵近衆の守護して御出馬有しが天王寺口庚申堂の前に小き小屋の有ける中に何者が捨置けん掛硯有しを上野介の家士と右衛門太夫の兵士と兩人にて見認互に我者にせんと奪合しが喧嘩を成て終には双方鉄砲を打合けるに甘懇恰かも戰場と異らざれば供奉の諸士等大に騒擾各同鎗を取て突境らんと支度をなし一先御前へ馳集りければ大御所御覽有て斯る急場は長道具は宜からず太刀よてとは足ぬべしと制し給ひけれ共諸士少も聞入ず鎗を取に歸らんと後陣を拒て急ぎける程に後陣には騎馬武者四五百人隊伍を整へ繰出さんとする處に出逢是敵と見て先手少く引色に成しに後備の永井右近太夫及尾張宰相殿の人数常陸介殿の人数も共に破れ立留ん様のなかりければ飯森八幡伏見京都近傍迄も散亂したるに其時小十人組石丸庄兵衛八木善四郎田中市郎兵衛等彼兩人挑合し小屋へ立向ひて二人の歩卒を擄取て來しを本野上野介立出て汝誰の家來にて何の爲に砲發せしぞ又は誰が指揮せし者やと言忙敷く問ひ糺すに彼歩卒は恐怖れ禁しとは本多上

野介の家來にて上様の御成とは夢にも知す朋友と些少の間違より遂に斯の舉動に立至しん
 誠と恐れ入て候何卒生命ばかりは御助下さるべしと只管に詫入しにぞ上野介は我家來ある
 由を聞て心中大に恥入休を大御所疾くも御推察有て宜ひけるは我等本街道を過ぎる耳か殊
 に旗長柄等もなく間道より來りし故心付ざりしも道理なり決て彼一人の罪にわらず其儘追
 放なすべしとの上意に上野介は發と恐れ入誠に眞加ふ叶し者なりとて其儘歩卒を追放す依
 て大御所の寛仁大度成を感じ奉つり上下一同涙涙袖を濡しける然る處へ御先を乗廻りし小
 栗忠左衛門馳來り馬上ながらに言上しけるは御心を勞し給ふに及ばず唯々内々の破れにて
 候と言捨て又々陣々を馳廻ける大御所は扱々狼狽たる者共哉と御意有ける中に御近侍の
 八々も追々立歸來りければ頼て茶臼山へ登らせ給ふに中井大和は豫て御陣の用意を致置
 ければ切組し小屋を八夫に荷せ來しが其切組は少く寸法の相違有て廣過ければ九尺の梁
 に六疊敷あり幕を以て内外を張廻し帷を垂て二間とあし則坐し出來成しかば諸大將にも表
 の方三疊敷にて御對面有けるを誠にて御賀素成御事と感せぬ者なかりける
 世に虚偽を傳へて人を欺く野史稗官の書最を多し其中にも大御所問道を通御有し時伏勢
 俄然に起りて前路を遮りしに御近侍等供奉の面々は又眞田勢が出たりと大に驚愕しに又
 い横合より伏勢起りて馬の前足に薙蹴を以て馬上の人々を引路せしに供奉の諸士等皆散
 らに傷を蒙り血に染らぬ者なきを眞田は年來の素志を遂るは此時なりと呼りて士卒を
 足の如くに下知して其老翁も逆吐を吐せよと罵りけるに大御所は御若年の際より戰場に
 て急を臨み給へば御總身靈へ給ひて吐逆し給ふ後に御總身金鉄の如くも成せらる、御

難有しに此時大久保彦左衛門と南光坊の兩人のみ御側にて其他の御旗本多くと深疵を
 負本多上野助板内膳止水野日向守等も眞田勢も取圍れて危く見あければ大御所も今は
 是迄と御覺悟有てか御馬を松原の方へ一先御引退有けるに金地院宗傳紫衣の上に玉襟を
 掛て御馬の三途を確と打然様の思行にて大功成就せんと思も寄すと罵り進せしに其時大
 御所は頻と逆上し給ふを眞田は遙に是を見て今は是迄かりと言捨て行方知すに成し杯
 と云嘘説を記したる書世に數多有是等之此茶臼山の空破杯を原本となし文を飾りし偽説
 なり其外俗間も傳ふる妄説最も多ければ看俗俗傳を信じて誤謬給ふ事なかれ

○岡山合戦の事 水野青山兩組の士武勇を争ふ事

又岡山表へ發向したる大坂勢の大將は大野主馬助治房にして諸將の命令を司どり斧の紋
 付たる旗を翻へして左に新宮左馬助右に布施傳右工門兩人を先陣と爲岡部大學中島掃部助
 岡山總殿助等都合六組を前後左右に隨へるの中より押出し池を前に隔て根來組三十騎を一
 隊とし岡山の北は二宮與三右工門御宿越前守と定しが越前守は其以前より眞田左衛門佐
 と謀合するとの有て茶臼山へ赴きしに其處は早越前勢押寄來て引返すべき道もあく御宿は
 筆々數軍もせずして果と討死爲たる赴き逆歸し者の知せにより主馬の旗本を此所處押出せ
 り其傍らより茶臼山の四方一面を大野道大石川肥後守内藤宮内少輔長岡與五郎小倉作左衛
 門等陣取ける關東の旗本は三萬餘騎として殊に將軍家自身も寄ると聞えければ各自堅壁を
 呑て待掛たり殊に大阪勢の中には日本の大將軍と對陣して合戦すると武士と生し甲斐有は
 此岡山を墳墓地と定て目覺き戦ひを爲んと勇氣凛々として見ゆるもあり關東勢の先陣には

松平筑前守〔知賀原加藤左馬之助〕黒田筑前守藤堂和泉守井伊掃部頭細川越中守を左に備へ
本多総腹助同豊後守石川伊豆守時田權助片桐主膳正遠藤但馬守本多豊後守を右に備へ御旗
本の勢には大番頭阿部備中守高木主水正次に御書院番頭水野隼人正青山伯耆守松平越中守
高力左近將監其他渡邊山城守土岐山城守牧野駿河守板倉周防守永井信濃守井上主計頭安藤
彦四郎〔彦四郎は天王寺口に至り討死す〕宮城丹後守青山大藏大輔阿部修理亮其次は酒井雅
樂頭土井大炊頭御馬前には大番御書院番御小性組其他御近習御小性等供奉し安藤對馬守は
後陣に備へ此時大御所よりは御使番久世三郎坂部三十郎小栗又一佐久間河内守等を以て
急に戦ひを開くまじき趣きを告られしかば先手の加賀守此軍令を堅く備りて戦ひを見合居
たりしが己に己の刻も及びし頃天王寺表にては逆戦ひを開きしと覺く鉄砲矢叫びの音頻
に響馬煙りの夥多しかりければ是は後れたりと加賀の二万餘騎動と聞の聲を揚先手長九郎
左工門入道加藤山崎開齋本多安房守寺西若狭村井飛彈篠原出羽津田和泉等諸隊を操出し伴
八彌安見右近藤原織部野村左馬丹羽織部等眞先に並列で大野主馬の備へ鉄砲を打掛煙の中
より突入て安房は鎗下の高名を見伴は一番槍を合せ其他本多安房山崎開齋寺西若狭村井飛
彈津田和泉篠原出羽を始として喚き叫んで攻戦ひ分捕高名は枚擧るに違あらず又將軍家の
御旗本水野隼人正の組は白母衣青山伯耆守の組は黒白衣松平越中守の組は鳥毛半月の指物
にて皆一同に聞の聲を揚眞陣に突て幾り各自粉骨を盡して戦ふたり殊に水野青山の兩組相
互に去年の冬より武勇を争ひ剛健と競ひけるが今日は水野隼人正の組は第一番に加賀勢を
兼拔敵中に討て入れれば青山の組士も是に打續て乘入互に軍功を立ん者と勇を震て戦ひし

が青山の組士の中野一色頼母は某しの祖先も此所よ於て討死を成しが先例に隨ひ某しも今
此所にて討死成んと云や否や群集敵の中へ馳入東西南北へ駆廻りくく敵三十餘騎討取畢に
討死成たりけり是を軍戦の最初として組中は勿論郎黨共も打混交て我劣じと戦ひけるが黒
白の母衣二隊に分れ勇を勵み死を争ひ前後左右を顧みず粉骨碎身して戦ひける其景況は勇
々敢も又目覺く是が爲に大坂勢散々も打破らる爰に青山伯耆守の家來島田總五郎と云者一
番首を取て來り又伊與田與四右衛門も同く首を持來れり是に依て相互に一二を論じて果し
なきを聞て伯耆守は伊與田に向ひ總五郎は若年の身にて殊更に兇首なり又持參するとも早
し汝等の討取し首は甲符にもあらず又持參せし時も聊か後れたり縱令汝等が一番あり共島
田に譲りて然るべきに争論するは大人氣おしと窘められて餘方おく心中不快を懷きつ、首
は是にも限るべからず何と再再是を論せんと又々敵陣に駆入名有者の首を時んと榮武者に
は目も掛す深く進て奮戦し前の恥辱を雪んと血眼に成て駆廻り陣間の中に胃首を携帶來り
主人の前へ持參せしに伯耆守は情を見遣此は無双成戦功なりとて大に感し即時に褒美を
遣しけり其他鈴木兵左衛門佐野助左衛門等以下の人々各自戦功多かりける中に青山刑部右
工門を給として十八騎の人々何れも奮戦なせしかど終に討死せしは最衰成事共なり又青山大
藏少輔幸成は其頃御勘氣を蒙り居ければ忍びくくに發向し自身敵陣に突戦して敵數多突伏
家來首を取せけるが中にて岡首四個を持參して將軍家へ御覽に入れれば大藏の戦功無双
なりとの上意有て以後御勘氣御免を蒙りける松平越中守にも自身に鎗を取て先手進み力
戦しければ高木主水正も大番士を引具し水野青山高木及松平越前守等の組々の士卒共も皆

將軍の御馬廻を遠く離て力戰せし程に高々分取等も若干有しが又討不手負も尠からず其砲
り岡山筋にては敵兵の埋置たる地雷火一時又發しければ先へ進みし御旗本勢大いさ驚き色
先さ立一時は覺えず八破れと成たりけり

將軍家御旗本合戰の事 御旗本勢奮戰の事

此時又將軍家馬廻の諸士等は拔々て先へ進み高首を争ひし機岡山筋の地雷火發せしに
驚きて關東方の諸軍大に色めき騷動しけるより床几廻の者共御本陣の透たるを心痛せ
しが却て將軍家には少く驚かせ給ふ御氣色もなく御自身に御鎗を取せられ敵中へ駈向はん
と進ませ給ふを後陣に備し安藤對馬守斯と見るより大に驚き馳來り高貴の御身として輕々
數御舉御哉と諷言奉つりて御馬の口を止めける處へ御先鋒へ備し加藤嘉明黒田長政等馳來
て御旗本を守護せしかば將軍家には采を執り崩掛る味方を制し倍々進め給ふに大坂方大野
道大田士馬内藤宮内少輔山川帶刀新宮左馬助中島掃部助木村主計頃湯淺右近長岡與五郎小
倉作左衛門等は將軍の御旗本勢騷動するを見て其機を外さず突て出しに此時土井大炊頃利
勝は御馬廻に供奉し手廻は先鋒加一佐久間備前守同大膳の父子預置しが今大に破しを
見て大炊頃は御旗本より斬來り返せ戻せと呼はりく士卒を繼め塵のちぎれる迄に下知し
大野内藤等の勢を討破り頗る力戰して敵の首九十八級を得たり鳥居士佐守牧野内匠頭井上
主計頭等も士卒と俱に血戰し青山伯耆守并に組の士中根大久保今村松前土方安藤井戸川口
花房駒井等は各自高名有しが大島別所松倉服部等は討死す又謀計を敵方に告たる古田織部
正の子息左近は父の不義をや恥たりけん同じく青山の組にて忠死を遂しこそ奇特なれ水野

隼人正の組には水野重條横田赤見天田平井三木本郷堀田齋藤等は各自戰功有しが松平(助
十郎)山口篠田父子山崎等は何れも戰死せり松平庄九郎は自身姓名を名乗て衆に抽で敵兵十
四五騎討取しが今年二十六歳にて終に戰死す是之前の主殿頭家忠の子息として今の主殿頭
忠利の弟なり曾祖父主殿助好景は三河の長良にて討死し祖父主殿助忠興は葛葉山にて討死
し父主殿助家忠は伏見の役又討死す斯の如く四代迄打續て討死を遂しと比類なき忠臣哉と
見聞する者稱しけり高木主水正の組は渡邊金田高木の三人深斗を負大岡米倉林間宮筒井
等討死し山田兼松近藤小笠原榎田高木等は大に高名せり松中越中守の組は跡部駒井水野
監助の組には石丸井上主計頃の組には土屋山崎周部板倉周防守の組には稻垣高田彦坂成瀬
豐後守の組は中山安藤其他御小姓衆には田中主殿川口長三郎木村源太郎御近侍には安藤
甚助喜太美平三郎八木勘十郎藥科係九郎中山助六石谷十藏小栗平吉の使者には戸田藤五郎
中山勘解由等何れも粉骨碎身して戰功最も多かりけり御使番の中にも安藤治右衛門正次は加
賀勢の先鋒へ御使に行けるが其時城兵五六十騎引行を見て兵士は敵討取よと下知しけれ
共如何成故にや排々數々追されば安藤憤怒て馬に諸鎧を合せ眞驅に敵陣へ駈出けるに敵十
二三人取て返し安藤を押包で討んとするを心得たり馬より飛下様太刀拔放し敵三人の
額を三刀切付けるに城兵も安藤の額を三刀切て互に尻居に打居られしが安藤頓て立上り太
刀風烈く切て城兵は敵し難くや思ひけん跡をも見ずに逃出すを何國迄も追々々々
腕差伸して切倒す處へ城兵五六人取て返すを治右工門の家來平山太右工門は主人の安否心
許なく跡を慕ひて入りしが衛と追寄敵三人へ手を負せ二人打取主人の打取たる首を持添安

藤右工門討取たりと呼り、御旗本指て駈來れば將軍家の寛有て這は援群の心勞なり併し治右衛門は負傷たれば一先抵療致すべしとの上意より歩行の士六人を付られ平野へ歸て療養せしが十九日に至畢に空く成ければ其忠勇を感じ人々惜ぬ者はなかりしとぞ酒井雅樂頭は馬前に供奉しければ手勢は其子息阿波守と細川玄蕃頭に指揮せしに味方の諸軍崩れ掛りしを少しも揺るめく氣色なく静まり返つて居たりしが好機を察て敵の大軍へ突進り烈敷戦ひしにより城方又三四段引退く此時敵味方の旗馬馳東西に入亂れて味方進めば敵退き敵兵悉くば味方退き退つ返しつ挑合互ひの闘の聲は天地に轟き射違矢玉は雨より繁く槍長刀の尖鋒より出る火は電光より烈敷何時果へき共見えざりければ將軍家頻りに旗奉行三波土佐守を召れ予が旗を敵の正面なる沼際迄進めよとの仰に三枚畏まりぬと走行崩る、味方を押分、軍の正面を沼水を前、當て近々との旗を押立しかば敵の大軍は旗の近く進んだるを見るよりも大いに氣を呑れ何時となく引色見えけるを寄手は是に勇氣を得て加賀勢は大野父子始めの大軍を追崩しける處に稻荷明神の前にて大野の軍勢大返に引込して戦ひけれ共數度の戦ひに精神疲勞たる者共成へ罵詈雑言たる加賀勢は揉立られ又々崩れ立機から右備への本多豊後守遠藤但馬守本多縫殿介片桐主膳止時田備助石川伊豆守等人數を操出し横合より突て掛れば大坂勢も此所を専途と防禦戦ひ双方火花を散して切崩ししが畢に關東勢に切崩され城方指て逃退くを味方は房関を揚一人も餘すなと追打すれば大坂勢は既に惣敗軍と成玉造口の東門より我先にと逃込ければ寄手向も付人んとせしに城中より北村五助と名乗て火藥の箱を投出し是に火箭を射掛ければ此火藥一度に發し四方へ飛散けれ

ば雲霞の如くに襲來りし寄手の大軍大に驚き周章狼狽と大方成す一先櫻門の方へと引退くを本田豊後守の一手踏止りて戦ふ機本多縫殿介は千貫櫓の下にて鉄砲に打れ深手を負打に危く見し處に家人等來て主人を扶け退きたり石川内記成堯は頗る奮戦して敵兵數多討取けるが其身金鐵にも有されば遂に討死成たりける然る勝誇たる寄手成ば少屈せず二本松の築用場より亂入せし其中に田野右京山上彌四郎と云者先將軍家御旗本の崩れる時共に逐立られて退しが陣營へ來りて兵糧籠を持たる人夫の中へ馬を乗掛悉く踏破りしに後日其の詮論有し時臆したる様子有しかが遂に改易と成しと此日の戦ひは岡山筋の先手加賀勢にて討死せし者僅か五十余人として敵の首級を得ると三千二百余級の多數に至しとぞ

○阿部正次父子高名の事

是より先關東勢の先鋒引色に見わければ大坂勢是に氣を得て挑み戦ふ其中に將軍家の右備へ大番頭阿部備中守正次の組下五十余騎に引續き黑白だんだら筋の旗白地と石餅の馬鞍と押立郎黨は背扇子の指物を指隊伍を止して備へたり其日正次は緋緋の鎧と同毛の星兜の指物を緋白の棧しの指物にて黒き馬の太く逞しさに梨子地の鞍置て優りと打乗組中并に郎黨へ指揮しけるは斯の如く打込の戦争は敵味方の差別を能々注意すべし同士討して人々笑はれまじ殊に關東勢は遙々の長逆を經たれば顔色自然と黒く其上泥沼を越たれば指物迄も汚れて有る是を驗に戦ひな自然と別ち半敵は長らく籠城して顔色白く馬物具も奇麗成を餘す討取へとて一同に英々聲を出して進み掛るに御先隊の中栲葉色の指物を指たる武士共足を亂しては旗本へ雪額掛るを止次定を屹度見て腹黒味方の舉動敵は確手に見知たる

を討止りて討死せよ正次是に在止まれや者其も恥しめけれ共敗軍の慣習とて耳も更に聞
 入す我先にと逃行正次の長子修理亮正澄の進んどそる道と塞閉れければ其近傍を横行て一
 丈有餘の高岸より馬を躍らせ飛越けるが人馬二ツに離れて落馬せしも正澄は若年にて故剛
 勇成者なりければ再度馬に打乗て能敵も有ば組敷んと四方を見張せば遙彼方に砂煙を立一
 群の敵の襲來る中にも大將と覺しき武士逸趁に馳來るを正純は是ぞ願ふ所の敵なりと馬
 寄突て掛るに彼敵も心得たりと鎧を合せ双方秘術を盡三十余争ひしが正純の尖と鎧先に
 敵は漸次に下鎧と成を付入く草摺の外を十分に突ければ敵は堪らず馬より眞逆さまに落
 る所を押へて首を取たりける斯と見るより其首戻せとて敵兵の駈來るを正純は儲と腕み此
 葉武者を云ながら鎧取延て突倒し郎等に首を討せて見れば是も一方の儲と思しき兎首な
 りしかば此首級二ツを本陣へ指上たり將軍家御覽有て這は目覺き戰勇なりと珍感賞賚か
 らず正純は大も面目を施し蹄陣しける爰に又備中守正次は自身鎧を脇袂か敵兵淺井三浦
 が三百餘騎の中へ面も振ず駈入て十字に當り巴の字に追廻し間睡時に敵三人を突浴ければ
 郎等駈來りて其首を取又郎黨共も胃首其外數多討取組の土坪内五郎左衛門も胃首を得し所
 に敵兵は正次を取圍み已も危く見えけるを郎等下宮利右衛門内藤川石衛門柴原庄右衛門
 以下の面々馳來りて敵兵を逐拂ふ中にも角右衛門は奮戦して敵數人を打取たり下宮利右衛
 門も數人の敵と戦ひ双方ともに手負て勝負も附さりしが焦て一層奮戦し終に首を取其處
 本陣へ馳歸りて斯と告奉つりければ將軍家の御褒詞を被りたり都て正次の家中へ打取し首
 數廿五級組中にて五十八級都合八十三級の多さを得たり味刀には手負討死數多有しと云

凱陣以後に至大坂表の戦功を調將軍は旗本の剛膽を糾されし時に正次父子を以て證人と定
 らしめりとかや殊更正次の戦勇は眼前に上覽有しとて蹄陣の後下野國都賀郡の内にて
 七千を以ら加増有都合二萬二千石と成り奏者番を命せられしか元和三年又陸八千石を以
 加増有て上總國夷隅郡大多喜の城を賜り同五年加恩二萬石を賜り都合五萬石にて川州小
 田原城を下されけるに又程もなく五萬石加恩有て武州岩槻の城に移り寛永三年四月六日に
 又三萬石を御加恩有て大坂の御城代を仰付られ攝州の中豊島川邊有馬能勢の四郡にて三萬
 石を加へられ都合八萬五千石余を賜り五万石軍役まで大坂城を守るべしとて七百五十人扶
 持を下されしも偏に正次父子此際の軍功を御稱美有し余なりと人々感じあへりしとそ

○石川嘉右衛門放逐の事

石川嘉右工門重之は大御所の供奉を成て河内の平岡より南へ廻り天王寺表まで戦争すべき
 を焦立て玉造口の東門より城中へ乗入櫻の門前にて大坂方佐々十石工門と力戦して終に首
 を取亦佐々の郎黨等の襲來るを是も散々に追打して此を取夫より西大手へ出て陣營へ馳
 來る是を御旗本の一番首にて殊も兎付なりければ大御所は由々敷職勞とは思召れしが御軍
 令に背きしと故令は重く人は輕しとて勘氣を蒙りけり此嘉右衛門涉勘氣を蒙りし後家貧
 くして母を養ふべき活計の無き能淺野家に身を寄母を養ひ孝道怠慢なかりしが母の死した
 る後は武門を棄て隱居翁の教訓を父唐土聖人之道を學び殊更に詩と能し和歌と詠て文墨と
 樂み比叡山の麓なる一寺村に柴の庵を結ひ且夕高松の月に心耳を澄し雲谷の嵐に塵を掃
 ひ閑雅幽逸に世を涙り軒端に木傳ふ猿の聲化木を運こふ山賊の外にと訪者とては林道春堀

菅原深草の元政上人などいひ陸じく語ひてこそ慰さみけれ筆 題 空草 韻 湖 卷 繁 遊
 深領 雨原 憲 樞 濤 とも云へき風雅の高操世に其名高く詩歌を乞求る者最多かりし
 に自ら名は山字を文山と改め六々山人とを號しける 後水尾上皇の御宇其風雅成を 叙聞
 有て屢々仙院に召給ひけれと

わたらじな 湖見の小河の淺くとも
 老の涙をふ影もはづかし

と 奏聞せしかば倍々其高尚成志操を 叙感在しけるを最も賢きはとなり其後漢晉より以
 降唐宗迄の高名き詩人三十六人の像を狩野探幽齋守信に畫せ其像の上に自筆にて其人々の
 詩を題じ和朝の歌仙と撰擬是を房間の壁上と掲げて居處を詩仙堂と號たりしを其際世に珍
 奇隱遁者なりとて其名世上に隠なく今の世迄も文人雅客の都に遊歴者は必ず此詩仙堂を訪
 ね其風雅を慕ふなりしとぞなん

○大坂城中放火の事 擲手合戰の事

豐臣内大臣秀頼公天下は下恢復の機唯今日の一事に有と慶長廿年五月七日の未明より相傳の
 旗旌馬嘯を翻へし櫻の門迄出給ひて數萬の將士に左右を護衛せ床几に腰を掛合給ひ斥候の
 注進を待れるに大野修理亮は御前に出某し是より茶臼山へ到り真田左衛門佐と謀合せて
 は出馬の機會を言上せんとて急ぎ彼地に到り佐衛門佐と對面して此事を告げるに左衛門佐
 は左に右秀頼公御出馬有ては自身に傍下知あらば味方一層の勇氣を倍いべし疾は出馬を願
 ひ玉へ次には西國勢の備として船場表に隊伍を立し明石掃部助を間道より寄手の背而へ廻

して大御所の後陣へ討入其時刻を量りて天王寺表の味方一時に押懸前後より挾さんで討取
 んと是必勝の術なりと述ければ修理亮も道理と同意し直に城中へ引歸し其旨趣を秀頼公へ
 言上し明石の方へも下知したり秀頼公にも御同意有て即刻御出馬に成んと爲給ふ處城中に
 ては此度の戰爭に秀頼公のみ出馬有ば其御跡へ火を放さんと企つる者有により容易に浮出
 馬有んと然るべからずなどと妄説を申觸して何となく城中穩やう成す是に依て御出馬も急
 んば成難く然る處に又和陸の扱ひ有しなどと風聞頻なりしかば秀頼公も大野等も疑ひの
 み懷きて更に一決せず彼是時刻の移りしかば其間に茶臼山の眞山勢大に敗軍し左衛門佐も
 最早討死せりと聞へしに秀頼公驚き給ひ然ば何時迄斯て有へきぞ出陣なして我も俱に討
 死せんと宣ひけるを速水甲斐守馳歸り馬より飛下平伏して天下に有名る豐國大明神の御威
 光も早是迄と見えては御先手の下知も悉く相違し御味方物敗軍と相成候只今愁ひに御出
 馬有ても其詮更是有まじく候夫よりは疾く御本丸を堅固に守護て時の至るを待せ給ひ社稷
 と俱に御自害有て豐國大明神在天の尊靈に告玉はんと然るへく候はんかぞ申上けれが秀頼
 公も道理と思され今は詮方なく櫻門より千疊敷へ引取給ふ此時に至ては城中誰有て士卒を
 下知する者もなく衆人唯色ゆき立ち落支度する者のみにて敢て敵を防がんとする者なかり
 けり長曾我部は昨日八尾表一戰の後は今城へも入す股肱と思ふ大野主馬さへ何國共なく
 去ければ況て其他の烏合の兵卒我先にと天満川長柄川京橋を始として入雪額をつかせて落
 行けり秀頼公も千疊敷より奥殿へ入給ふと津川左近は御旗馬嘯を歌の手に奪れんと口
 惜く思ひし故惜からぬ命を存命て戰場を遊歸りて候と御旗御馬嘯を千疊敷へ投出して其儘

にひ免候へど諸肌脱て腹十文字と掻切たり郡主馬助は我こそ殿下の目鑑を以て黄母衣を免れし其甲斐なく君側の姦臣小人共に讒言され一として我が才とは容られず然どて其姦臣其を討捨る事も成難く其儘に打過せし後念さ上奮腕の御陣には關東勢の先鋒藤堂和泉が粗忽と天王寺表へ押寄せし時速水甲斐と謀合せて藤堂の陣へ夜討をせんと既に野良策を獻せしも大敵飛邊等と遮られて必勝の策を空くすまた住吉平野へ間者を入れて敵の本陣を焼打せんと勸し時も姦臣等巧に辨舌を震ひて我言を少も用ひず只今斯の如く成行候は畢竟主君秀頼公御運の末こそ敢果無けれど涙を兩眼に溜しながら郎黨共を呼集め我は此處にて切腹せんが此短刀は事故有て先年黒田筑前より我に贈與し其時に我此短刀を以て一度は用に立候はんと挨拶せし詞の末に今日只今切腹の用と立しと成ば汝等此短刀を我亡後に黒田家へ持參し其の旨趣を申述一先返渡すべしと言付置て一子兵衛を招き父子諸共同所にて腹一文字に掻切ければ郎黨何某運命を守り直に介錯成にける實に斯の如き忠臣義士も其詞の行はれずして敢果なく爰に消失しは爰と云も愚なり爰に眞野豊後守鍋島式部少輔等も同く千燈敷にて切腹す堀田圖書助野村伊豫守等の兩人は南口の合戦に散々に打なされて九矢は眞毛の如く半死半生と成て本丸に歸り左も右も詭術有んと兩人謀し合せて引返に此時城内にては警所の役人大角與右工門佐々孫助等の兩人は豫て密に合して有しかば時分は好と大危所へ火を放せしは殆ど未の刻なりしに此火勢忽ち熾になり城中一團に焼上り猛火頗る烈しければ堀田野々村の兩人は本丸へ入事も成難く因て二個に別れて野々村は二の丸橋の上にて切腹し堀田圖書助は我邸へ立歸り妻子を刺殺して後本丸へ入んとして玄關迄來りし

に早加賀勢押入れれば圖書助は玄關の式臺の上にて加賀の家士堀田平右工門と鎧を合せて數十合火花を散して方ひけれ共双方共に鎧方乱れ倍々精神を勵して涉合しが終に雙方共倒れ伏轉しに圖書は今朝よりの戦争に疲勞果て立も上らず懸き在しと平右衛門は勃起と立て既に首をば捕んとせしが圖書の武勇を感じては名をも糺さず討果さん惜き者よと胸に浮みて上に跨り圖書に向ひて名乗くと呼りければ苦き息の下より我こそは堀田圖書助あり斯成上は神速と我首渡して成佛せん切て冥土の思ひ出に貴殿の名をも打聞んと云れて此方は打驚き倍は某しの従弟なりしかと送、仕官の身にしわれは今日只今が初の對面別離に臨んで我名さへ名乗る殺すは本意なく思へと名乗れば却て黄泉の障と須臾猶豫有ければ祖伏られても圖書助は此情況を見上つ、不審と思ひけん我は今朝よりの戦ひに深手を多く負し身成ば迎も亦命思ひも密に疾首取て其方の手柄にせよと叫りければ此期に至て平右衛門も何と詭術をかりしとぞ涙隠して首打落し切ても何の回なりと泣々念佛を稱へつ、本陣指て歸り賢い遠き山路を隔たる仕官の身とは云ものも現在血脈の近親と鋒を交て死と争ふと弓箱取身悲しきものはあしと打叩つと平右衛門は頻に涙をせ落しと道理責て哀れなり平右衛門も圖書の爲に半負し餘疵最も深かりければ是も程經て死したりけり是より前伊東丹後守は今朝出陣在りしと未だ城へも歸らざれば或ひは反問なしつらんと風聞最高ければ城中の將士等は薄水を踏か如き心地して倍々途方を失ひけるが秀頼公淀殿及北の方を始めてとして女房達も諸共に天守に登りて細自害有んと既に其覺悟在し處へ速水甲斐守暫時くと馳來りて合戦の慣習先鋒破れ其後陣にて勝利を得ると和漢共其例勘からず未々

御自害には及ふまじ疾々天守を下り給へとて女房達迄下し參らせ月觀櫓の下より蓋田曲輪
 朱上等の櫓へ送り參らせしに此時渡邊内藏助は昨日道明寺口の合戦に某しは重傷を負ひへ
 ば最早御供も仕つり難く是より御暇や上人と一禮を述るや否や諸肌脱て切腹せしを見て母
 の正榮尼は壯むる子を先立て老たる母の後に残りて何かせんども是も同じく自害せり又淀殿
 は如何にもして秀頼公御助命の事を計らひくれよと大野修理亮へ涙ながらに宣まへば修理
 亮より京極肥前守渡邊長左衛門等を御使として大御所の御陣營へ遣はし只管秀頼公御母子
 御助命の事を願はせ給ふ旨や上しが備前守長左衛門之此事歎願せしか共事成就まじと思
 ひしにや途中より遠電して歸らざれば更に是非の様子も知れず城中の人々戰慄居たるばか
 りなり又大坂城の搦手の寄手は京街道より京極若狭守河丹後守石川主殿頭等馳向ひ松平和
 泉守は守口に出陣して遊軍たり中にも石川主殿頭は若年ながら恰剛生質にて家人石川半右
 衛門を京極の陣へ遣はし野口の堤に切所あるを幸はひに此所を越て陣を張るは方然るへ
 くと申送りしに京極方には切所を跡よし陣取んと如何あらんとて再三再四使者來往しても
 京極方にては同意無りければ然ば主殿頭一手にて切所を越んとするを見て京極勢も後手へ
 廻んとを無念と思ひ遂に切所を越て堤に柵を配たり石川遂は堤に上りすして遙下なる島中
 に隊伍を立しに午の刻比大坂勢仙石豊前入道宗也津田方水今津圖書竹光伊豆守大塲土佐
 守淺香長守本宿所帶刀生田茂庵原を將として三千余人備前島片原町の方を指て繰出せりと
 注進有しかば石川勢は京極勢の後に續て堤の上へ押上るに石川の家臣中黒孫兵衛進出せり
 るて波方に見える城兵は随分剛勇なる將士成んに斯の如き陣立よて戦争せんは頗る危し必

定京極勢は崩る、成ん然すれば我々とても共に崩る、は當然なり縱令京極勢能防禦戰ふと
 雖も此方の軍勢も成す事此方は此儘島中に隔り陣取居て若や京極勢の敗軍せば好機會を
 察し横合より突て掛らんと必勝の良策成ん其期に至りて萬々一防禦難きとも有は假令討死
 なすども世に犬死とは言れまじ大將御下知如何にやと家謀郎黨の前をも憚らす預言せし
 に雖有て否とカさん者もなく一坐白けて見えける處に遙か未坐の大河内企三郎は若年なが
 らも進出て只今孫兵衛の中所道理なり我不肖なりと雖も是も同意し送に粉骨碎身して其も
 勝利を計んと答へければ是にて衆議一決し前島豊太郎を以て其旨趣を主人主殿頭へや入念
 々用意に及ひしに家老大久保權右工門之逸馬を駈堤の上に乗上しが孫兵衛術師付斯と通じ
 ければそは必勝の良策成んとして神速に同意し衆卒一人も堤へは上るへからすと下知を傳へ
 元の畑中へ士卒を下して隊伍を立る所程なく城兵此處へ襲來りしが京極と兩家よて堤の
 上へ柵を結置し故敵兵急に攻ると能すして猶豫しけるを堤下の畑中より石川主殿頭は聲を
 打振士卒を下知して突て出當るに任せて四方八方を駈廻り無二無三に攻詰横筋違に突て掛
 れば城兵忽地散亂して一支支も支え得ず我先にと逃廻るを主殿頭は一人も余すやと追打し
 三十余級の首を一手よて打とり直ちに片原町迄押入て備へを立たる有様は最目覚しく見ぬ
 たりけり夫に引替京極勢は我が陣營の前後左右に柵にて確と結置ければ此場に至て急速よ
 士卒を進るとも成す彼是躊躇在中に石川勢に乗越れ後より漸々馳付て暫時馳をそ追たりけ
 り大坂勢よは仙石宗也を始として散々突崩され途方にくれ城中指て逃たりしが城へも入
 と叶すして名を借ひ者は討死し其外士卒に至ては右往左往に落行けり

○大坂落城願宣卿勇言の事并小出大隅守正直の事

然ば大御所は既に茶臼山へ御陣替有しは未刻成しし將軍家は今朝岡山表へ御旗を止られし所今大坂落城の津進櫓の齒を挽が如くなりしかば岡山より茶臼山御陣へ成せられ大御所に御對顔有時氣の御挨拶濟で後去年冬より今年に至り老練の身をも厭せられず出馬有ては下知を加へ給ふが故に敵城も神速に落去仕つり逆徒悉く誅滅に及びし段は禮厚く宜ひ殊更に先鋒の將士等も潔く勇戦しつゝ肥近の面々も戦功賜からず天晴添けなき仕合なりと聞ぬ上給ふに大坂所にも將軍の勇猛御下知の至ぬ限も無りしを感悦有て暫時下物語の後將軍家には岡山表へ還ら有ければ諸大小名各自甲冑の儘にて追々茶臼岡山の兩陣へ參上して御勝軍を祝し奉つり今日陣々に討取得たる敵の首級大概一万三千餘級を御本陣へ送て上覽に入諸將士も今夜は去年冬陣の如く各自野陣を張て兩陣所を守護し奉つりける爰に尾張宰相義直卿と駿河中將頼宣卿の陣營へ山上彦四郎内藤喜助の兩人を遣使して只今茶臼山の麓に打潰されたる城兵四五百人も見え候而御早く來りて打給へど仰遣はされしが左右時刻移りて此敵退散せし後兩陣漸々茶臼山へ着陣有て討潰せしとを甚だ御殘念に仰上られける頼宣卿は今年僅かに十四歳なり今日合戦の手に逢れざるを深く無念に思され頼宣を先鋒に仰付られさりし故空しく遊軍に廻り殘念至極に存候と仰有て頼に落涙有にし御側に在し松平右衛門太夫是を見て常陸様には未御若年に在ませば永き御一代は斯様のとは幾度も御座有べく然のみ御心に掛給ふまじと慰め進られければ頼宣卿は倍々憤り顔色にて右衛門太夫を睨められ頼宣十四歳の時が二度有へさかと宣ひければ右衛門太夫は平伏し

○秀頼公御母子御乞の事并大坂北の方御出城の事

て何と辞も無りしを大坂所聞召れて常陸が今日手に逢ぬを憤怒は道理なり併し其一言は太刀鎧よりも重く候と御感賞有て御涙を流し給ふ此時細川越中守水野日向守を始其他諸代新參の大小名及び御旗本諸士迄是を承まこり其勇言を感し奉つり如何にも紛れなき大御所の御子なりと皆々舌を巻て居たりける此時大坂城には頼宣所の火漸次に燒廣かりて千疊敷及び其他の屋根へも及し猛火倍々熾に延燒せし景况最物凄く茶臼山より見えたりける諸大名も取敢ず茶臼山へ馳集りけれ共御陣營狭少して悉皆列座さる能さりければ小出大隅守三尹芝の上へ躡踞て在けるを大御所御覽有て大隅くと呼せられしに大隅守御前へ出ければ大坂の方を指し給ひて那處は如何もと宣ひけるを大隅守は唯一目大坂の方を見て斯る方見えぬとこそいはねと思す涙を濡しけるを御側に在し諸將等は皆大隅守の御答を最不審く思ひて後日如何成御勘氣をも蒙るべきと手に汗を握りて最氣の毒と思ひしに大御所聞召れ汝之故大隅の由緒に就て秀頼とは誰からぬ者なり斯思ふこそ道理なりと仰有て却大隅守の心中を察せられ憫然と思召たる御氣色見えさせ給ひければ此處又集りたる大小名の中は故大隅の首恩を受し者數多有しが此御辭を蒙りて恥しきとに思ける此後にも大御所老臣等に向せ給ひて大隅の詞の舊恩を忘れざる所神妙なりとて時々御物語有しとかや

大坂城中にては漸次に猛火の熾として御居間近く燒廣りければ秀頼公御母子北の方を始として大野修理亮其他宗徒の者共守護を成つ、蘆田曲輪の邊は漸々火勢を遮給ひて在けるが先刻滝殿の御口上を以て秀頼公御助命の事を御願有し御使者京極備前守渡邊長左衛門等の

途中より透電して歸り來らざりければ重て遣された今木傳右衛門も同く其行衛の知さるにより上下力を落して暫時果れ果てそ居たりしが其時秀頼公は速水甲斐守毛利豊前守等に向ひ給ひて我等は故太閤の嫡子として天下兵馬の大權を採へさ身を以て天運拙く己に今斯の如きに及びたり今朝迄も十有余万の軍勢に大將軍と仰れし身の最期に至りては汝等甘餘八の外我に隨從成ん者なく天にも人にも捨られし我身の程こそ是非なけれど涙を拭て宣ひし速水甲斐守毛利豊前守は少しも騒かず何事も天命成ば今更驚き給ふとにいはず何れか勝負は有ものなり敵寄來らば其時にこそ御最期の一戦花々敷し給ひて打死成ん御覺悟有へしと辭を盡して諫めける其面色猶勇氣凛々として最凌しく見へけるを秀頼公は其方ども屢々苦難なし疲勞果たる身を以て不覺の死を遂んよりは我潔よく自害せん依て深く屍を隠すへしと宣ひ愈々御自害と決定され萩野道喜は淀殿を介錯し修理亮と秀頼公を介錯し豊前守と女房達を介錯せよと仰らる陸奥方製場の局宮内卿右京大夫輩の女房之皆々淀殿の面前に列並び正榮尼は昨日の黄昏衆に先立御暇乞して早く自害を成たるこそ羨ましく候へ我々も騒しからぬ今の間に御暇乞上ひはんと涙ながらに掻口説ければ淀殿も天下の主將と仰れし秀頼公僅廿歳に成せ給ひしも一日安堵の思ひなく臨終の際に至らせ給ふ悲歎は如何と拙き御果報よと泣沈まる、そ道理なり大野修理亮は此時北の方の御乳母に向ひ斯の情況に成果は上は御出城有て御自身に大御所の御陣に成せられ御直に御對面有て御母子御助命の事を御歎願遊はされんより外は有ましく候と諫ければ御側的女房達も修理亮の詞に同意して種々に諫進らせし北の方にも道理なりとて櫓を下り給へ共殿中は悉皆く燦失し僅の城兵も四

方々散亂して周章狼狽と大方成す何れも鎗太刀の類を引提て城中を馳廻りければ御供せし女房達は是を防禦と詮ふなく北の方の中に圍て各自身縮め石垣の下に佇立其鎮るを待居けるに熊野士ひの籠城せし堀内王水と申者石垣の方を不圖見遣けるに白地に葵の紋散しの被衣を着し給ふ御方を廿余人の女中左右前後を取圍居けるに心付近寄て誰人にや存すと尋問ければ供奉の女房達は關東の姫君より公川のと有て茶臼山へ只今成せ給ふなり幸ひ其許御供成れよと言に主水は豫て斯有べしと推察して在ければ心付いと御前に立雜人共を制しつ、城外指て出ければ奇手の中にも板崎出羽守は此体を見て直に駈付御供せり大野修理亮の娘も北の方を守護して出城せしかば修理亮は股股の家臣米村權右衛門を使として跡より追掛させ娘迄や合せけるは秀頼公御母子御助命のと御直の御歎願にては事整ふへからず本多佐渡守へ御使頼有て今夜の中、御歎願の叶ひ候様只菅御頼み有様姫君様を諫奉つれと口述を以て權右衛門より付しに權右衛門は君命成は難止難くいへ共此期に至て君命を離るるとも寄すは餘人へ仰付らるへしと應ずる色無く辭退しければ修理亮は莞爾と打笑ひ母敷は權右衛門の辭なり併忠義は二道なし我側を離る、も離れざるも其方の胸に有て忠義は變るとはなしと理を盡して説諭ければ途方盡て權右衛門は大手を指て走り出橋の際にて漸く彼姫君に追付進らせ板崎出羽守に斯と告れば出羽守は其方の名を豫て聞及ふ所なり幸ひのと成は女房達に交りて御供すへしと申ける故權右衛門は會釋して大野の娘と面會し又修理亮の口上を其處落なく傳言たり爰に茶臼山と天王寺の間に僅の家屋軒を並て土地の百姓の住居有しが此頃の戰爭にて本多佐渡守の家來共の陣所成居しが一先此處へ北の

方を入進せ直に茶臼山へ佐渡守を呼に遣されし故佐渡守早速に來りて北の方に拜謁せしに
 恁々の歡願を御委頼有ければ秀頼畏りて直に茶臼山へ至り其旨趣を言上せしかば大御所聞
 召れ姫の歡願道理を秀頼母子を助命たりとて何の恐か有ん姫の願の通許し遣すへし其方
 は直に岡山へ赴て將軍へ此旨趣を言上せし上意有ければ佐渡守は岡山へ駈付大御所の御口上
 を言上せしに將軍家には甚く憤怒らせ玉ひ何故姫には秀頼と供に生害致さぬやと以の御
 氣色を損じ給ければ佐渡守大に當惑を種々に詞を盡して左も右も御大所の御指揮に隨ひ
 給へしと申上置早々に退出し直に駈歸て北の方へ上上げるは兩御所供に秀頼公御母子御助
 命のと御開届は相成たれば此段御安堵遊さるへし定て御空腹にも半とみ膳を用意し付
 の女中達も食事を爲て能々お伽をすされよと急ぎ北の方へ膳を勧め權右衛門はは用の
 爲に此處に在へしと吩咐置萬端殘る處無周旋に北の方は其心勞を謝し給ひ今夜は此農家北
 の方の御住居と成ければ板崎出羽守は士卒と下知して最嚴重に警固しける暫く有て茶臼山
 かも御酒の膳等を進られ緩々休息有へしと仰遣されけるに北の方も女房達も數日の心勞
 今に至て少く安堵の思をなし其夜は眠り玉程に翌八日の正午頃迄覺えず上下寢過しけるに
 目覺て聞ば何地も彼地も豫この相圖の相違せしより秀頼公は母子を始城中に残し人々早生
 害有しとの知せに北の方は甚く驚愕せ玉ひ助命のは問濟も有ながら斯の如く陣々の相圖
 相違せしより果敢なくも城中は生害有しは天運の爰に盡たるかど悲歎玉ひて上下供々泣
 木戸く皆關東勢警固して其出入を許客されば詮方なく戻り來て北の方をそ守護し居たり

其後大坂平定せしかば此北の方を關東へ下し參らせしが本多美濃守忠政の内室は岡崎三郎
 殿の御女と渡らせ玉ふ山緒より忠政の長子中務大輔忠刻の許へ御再縁有て後に天壽院尼
 公と稱せしは此北の由の御事なり修理亮の娘は其際迄も御附人にて勤在しか處勞を煩ひ出
 して最早存命も覺束なく思しかば亡父の墓參り致し且は療養の爲に都に上り程なく彼
 地に死せしと因て權右衛門の計ひよて妙心寺に火葬を行ひしか權右衛門の娘も豫て修理
 亮の娘の側女を勤し者にて此凶報を聞て取敢ず馳付火葬の中へ飛入て燒死せしことを哀れ
 權右衛門は其後剃髮して權入と名を改め主人の娘と自分の娘の骨を一緒に揃集り肩に掛て
 高野山へ登り骨堂へ收納ける其志さしを感心して淺野但馬守方へ權入を召抱られ大方成す
 寵愛されて世を安樂に送しと堀内主水は先頃より北の方の御供して勤勞甚からざりけれ
 ば格別の思召も寄五百石を下賜しとぞ

○秀頼公御母子御生害の事并 眞田大助忠孝を守る事

津國の難波の春は夢あれや蘆の枯葉に風渡るなりとさしも故太閤殿下天下の財を以て力を
 盡し築き建られし金城鐵壁金銀珠玉を鑿め珍奇を集て精巧を究し宮殿樓閣も一朝忽地成陽
 一炬の火に焦土と化し始蘇半夜の塵烟と立登りしかば秀頼公を始淀殿にも火勢を避んと此
 處彼處に彷徨玉ひて漸々蘆田曲輪山里の土庫の中へ潜伏て夢も結ばず夏刈の蘆の一夜を明
 し兼玉ふに東雲近く成し頃城内の火勢も段々鎮火し旨趣洋進有ければ茶臼山より近藤石見
 守片桐主膳正等の兩人を遣はされて秀頼公御母子の渡らせ玉ふ蘆田曲輪を警固させられ其
 後井伊掃部頭警固交代を仰付けられ城内より二位局を召れて秀頼公御母子の御裝束其他

御供の男女總目を大御所御自身に筆をば就せられて書記し玉ふに秀頼公は故太閤殿下西國征伐の先例を用ひ給ひて梨子地緋絨の具足の錦の御直垂を召れ天下無雙吉光の御太刀しのさ藤四郎の御脇指を帶玉ふ御供の女房達には大野修理亮の母大藏卿の局内藤新十郎の母宮内卿の局木村長門守の母右京大夫の局等三人是は皆秀頼公の乳母とこそ謂えけれ饗場あきばの局其他お愛の方お室の方お玉の方以上三人の家臣は皆大野修理亮其子信濃守速見甲斐守其子出來丸萩野道喜入道津川左近毛利豊前守其子長門守武田左吉森島長次郎伊藤武藏守加藤彌平太堀對馬守眞田大助高橋半三郎同十三郎土肥庄五郎寺尾勝右衛門片岡十左衛門藤原八藏同三十郎小寺茂兵衛淺井周防守其子中高將監同半三郎竹田永翁同信濃守等なりと申上られければ二位の局は其ま、茶臼山へ密め置れける其後井伊掃部頭は城内に至て大御所の御使なりと申入し開門し速水甲斐御朱具足に緋羽織を着し其上に細の帯を締て立出たり掃部頭は近藤石見守を以て大御所の口上と故太閤以來の舊好を思召如何もい痛はしければ安堵の領地を遣さるへし最早何事も是迄も候疾々出城有へしとの事ありと速水近藤の兩人等暫し問答に時を移して秀頼公は母子は出城有へきに決定ければ甲斐守は然ば伊乗物二輿調進せらるへしと言しに石見守は何とて此騒擾の中にて二輿の伊乗物の急速に調ひ申へさやの迎には馬を進らるへしと云ければ速水は聞も放す大に憤怒如何に斯の如き情態に成せ玉ふ其辱けなくも内大臣殿は母子馬上に御顔を隠し玉ふ事の有べきか汝等如き棄武者達の存知たるにあらそと散々に罵りて庫の内に入門を閉るや否や庫中より男女一同に念佛稱名の聲最高らかに聞えければ井伊掃部頭阿部備中守等が下人共外より頻

に鐵砲を放掛けるに庫中には秀頼公本年廿三歳御母堂淀殿三十九歳を一期として念佛の聲諸伊に御自害有ければ豫て仰付られし如く大野修理亮毛利豊前守萩野道喜等夫々に介錯して其身も共に切腹せり此處にて自害切腹の男女惣員三十餘人なり中にも哀を止めしは眞田大助なり昨日茶臼山に於て父左衛門佐に別しより秀頼公御最期の御供せんと昨朝食したる儘八日の未の刻迄御側に詰居たりしが城外より逃歸る人々父左衛門佐と如何致しやと尋しに其行方を知ぬと云も有しが又大勢に取圍れ討死せられ候との返答を聞て大助は溢る涙を押拭ひ言をも得云す故郷にて母に別し其時に最期の爲とて授與たる水晶の珠數を鐵の内より取出し念佛稱名を唱へ居たりしが速水甲斐守は餘りに痛しく思ければ貴殿は昨日登田表にて高名せられ深手を負れしと承まはりしが主君秀頼公愈々御和睦望ひ玉ひて御出城に決定し且は貴殿は眞田河内守方へ送届けへしと購けれ共大助は父左衛門佐昨日茶臼山にて我は此處まで討死し秀頼公の御恩に報すへし其方は城へ歸りて秀頼公御最期の御供すべしと云付られたる父の遺言今更空しく仕つり難し出城のとは思も寄御芳志の段添けなしと道理を述て少しも動さず秀頼公の御最期に引續き小姓高橋半三郎十五歳土肥庄五郎十七歳高橋十三郎十三歳眞田大助十五歳何れも物具脱捨て四人諸供西より念佛高聲に稱へ雪の如き肌を押寛け一度に腹掻切たれば豫て仰を受置し加藤彌平太武田佐吉等介錯して同じ煙と立騰るを見聞する人感歎して天晴武士の風裁と落る涙を拭つ、惜まぬ者は無しとぞ

○兩所御凱旋の事并に參内の事

茶臼山の陣にて大坂所八日未の刻、秀頼公御生香有し旨趣注進有しを聞給ふと其儘御輿を促がされて板倉内膳正唯一騎のみ御先立にて如何にも密々御出興有て城内の燒跡を獲らず御遠見あり京橋通を還御在ましけるが斯様の大合戦の跡には必定大雨の降もの成ば如何にも道を急ぐべしとの御指揮成ども天朝かき晴渡りて一點の雲も無ければ供奉の人々は甚だ訝しげに思ひ居しに守口邊へ成せられし頃一天邊を流したる如く俄然と積曇て牧方より南方は大雨を突が如く降出し御輿の者も歩行兼し程成ば佐田邊より御馬に付せられ笠笠にて雨に濡玉ひつゝ泥泥渡らせられ木村與惣右衛門の宅に御休息有て亥刻頃漸々二條の御城へ着御し玉ふに内膳正一騎にて御先に乗付御開門有べしと打叩きけれ其番人共は御出陣の御留守中と云殊更夜中にて思も寄ぬとありければ容易に開門する者なく因て内膳正は父伊賀守の警衛する御門より駈入て大門を開かせ是より入城に成り城へ入せ玉へば阿茶の局は與斗を奉つりける此事大坂在陣の將士等雖有て知る者なく翌九日將軍家は阿部備中守高木主水正等に城門を勸番せしめ水野準人正青山伯耆守松平鶴中守等に櫻門及び極樂橋を警衛せしめ西國の諸大名は大坂表に百日有餘在陣して燒跡の掃除方を仰付られ大坂を御出馬有て伏見の御城へ歸らせ玉ふ此日川陣の諸大名は二條伏見の兩城に參上して大坂の神速に平定して四海靜謐せしを賀し奉つり翌十日より後れ馳に參向したる諸大名も追々兩城に御て御凱旋を賀し奉り十五日は大坂所 内參内有て 禁裏へ銀二千枚 仙洞女院女 へ銀五百兩百枚把死を献呈し玉ひ長橋の局へも銀三百枚箱州把を贈與せらる、主上仙洞院の御所にも神速の御凱旋四悔無異の治平に属する盛徳大功を返すくも 御威有廿一日には將軍

御 參内 禁裏へ銀壹萬枚 仙洞へ銀三千枚錦五百把女院女御は銀千枚づつ、を進せられける實もや公武御に歡悅の聲宮共に充滿してぞ聞えける
○秀頼公の若君御生縛の事
大坂の殘黨及び諸の者有んば尋訪出して石縛訴ふべき旨諸國の大小名奉行代官等へ觸示されしにより、近江國守備にても再なり諸國々より殘黨共を捕縛て送けるに京極若狹守は秀頼公の姫君を御乳母密に抱きて城を逃出し洛外の小寺に潜伏居けるを探偵たりしが此姫君は秀頼公の御側仕たる成田五兵衛助直と云者の娘秀頼公の寵愛他へ勝れて早晩懷妊の身と成り月重りて此姫君御生給ひしかば北の方發育せられ御子を成れしが今年僅七歳に成せらるにより餘り痛はしく在しませしければ御女子のととて助け玉ひしが後々尼と成て鎌倉の松ヶ岡東慶尼上人の弟子と成れしは成長の後此寺を繼給ひ天秀上人と號しまわらせ故貴く諸人又信じられ給ひしは此姫君の御事なり又此外も御同腹より男子御生玉ひしが女子と違ひて關東の關を憶り京極家の常高院尼に預けられしかば若州にて既に本年六歳に成せらる、遂に成長し玉ひしが今度一亂の最初より大坂へ呼進らせ國松丸とて傳仕たりしが城の陥るに及て乳母密かに伴ひ出て伏見邊に潜伏居給ひしを凡人成ぬ御方とて土地の人々御痛しく思ひて家に伴ひ進らせ食物を懇め杯しては父上の御名は何とぞ又是よりと何方へ志ざしと渡らせ給ふやと問進らせければ父方は上様なり我身は上内裏へ參るべしと思ふにより供せよと宣ひけるにぞ里人等大に驚きて左右勞り申せし中日來の御疲の一時に出しにやすやくと睡眠給ふ故里人等は後難の通べからざるを思て由無事をしてけりと涙



ながら二階の御城へ訴へ出ければ上にも御痛はしき餘左右助命を給はんと種々に評議有しかど逆徒の主將たるしは免され難く五月廿三日六條河原に引出して首を刎られけるが其場に至て六歳の幼稚も懷中より珠數を取出し西の方は何方ぞと問せられて西より稱名合掌して首を討れ給ふ其御痛はしき云も勿々思あり見物の數人一人として涙に咽はぬ者はなし此時此若君若州に在せし機に御抱寄を勸務し田中六左衛門斯と聞て板倉伊賀守方へ自身願ひ出若君の側らにて切腹したるぞ哀あり

○仁世四海謳歌の事

今年七月十三日年號を元和と改め愈々公家武家の御政務嚴重御糺明有て舊染の汚名を洗ひ維新の化普く至らぬ獨無くして公家の御條目武家の諸法度を仰出され寺社の法令迄定め給ひ、參内有其他舞樂蹴鞠猿樂等目出度と共も行はれ頓て兩御所都を立せ給ひ鳥が啼東都より還御在ましければ豊秋津の波もたかなる時を得て民の窺の煙さへ驚きに越て賑しき御代の榮を見えにけるぞ片桐市正且元は病弱至て重く駿府に止まりて療養し在けるが大坂落城と聞て其儘に魂の緒の絶て終に敢果無く成えけり齡今年六十歳還領は其儘長子出雲守孝利に下し置れ又大坂七組の番頭青木民部少輔一重は秀頼公淀殿の侍使として最初に參向せし儘止められて歸されれば一重は大坂落城と聞高野山に隠遁せんと願出しも御開濟なく直ちに召出されて舊の如くに仕官たり伊東丹後守資實はとまの戦事散々に敗走て城へ退かんとせしに城中最早猛火燃上りし入城すると能す因て高野山へ落たりしが秀頼公御母子のほ生害有しと聞て關東の檢使を得切腹せんと訴へ出しに是も思の外寛大の御沙汰よ

て本領安堵し蘇生の思ひをなしにける又赤佐内膳若佐左近を始廿餘人は秀頼公附近の者なれば所々に遁走潛伏居たれど左ても右ても遁れ難く思ければ妙心寺より出て檢使を受て切腹せんと願出しに大御所聞召れて大野渡邊等の如き秀頼母子に逆逆を勸し徒は天誅通れざる所なり又關ヶ原の時石田の叛逆に與し夫さへ免て助命せしに今回又敵を成し若其成ば是又再犯の罪許すへからす赤佐若佐の如きは秀頼譜代の者にて各自其主人の爲より出陣せしは忠義成に依り更に罪するに及ばず悉皆く助命すべしと仰せ出され又伊勢の巫祝戸部太夫は豊臣家の御師なりし故秀頼公の依頼を受關東調伏の祈禱をせし事露顯して山田奉行日向半兵衛中野内燕允の手に召捕入牢させし由聞召れ是も豊臣家の御師成ば豊臣家の爲より關東を調服すまじきにも非ず夫を入牢させるは奉行等の心得違なり逆忽地に免れ其後近隣諸國に身を隠し世を忍ぶ大坂の落人共今は御赦免せらるべしとて隨意に主人を求妻子のよるべしと定べしと諸國に驅渡されければ又世の變も有かしと山林に鉈居したる浪士等迄も其心逆地靜穩に或諸家へ仕て皆歡樂を竭したり斯てぞ廣き武藏野の惠の露に潤ひて豊秋津洲の外邊も東に照す日の光四夷八登も盛徳を仰ぎ喜み祝しけり

難波戰記 大尾

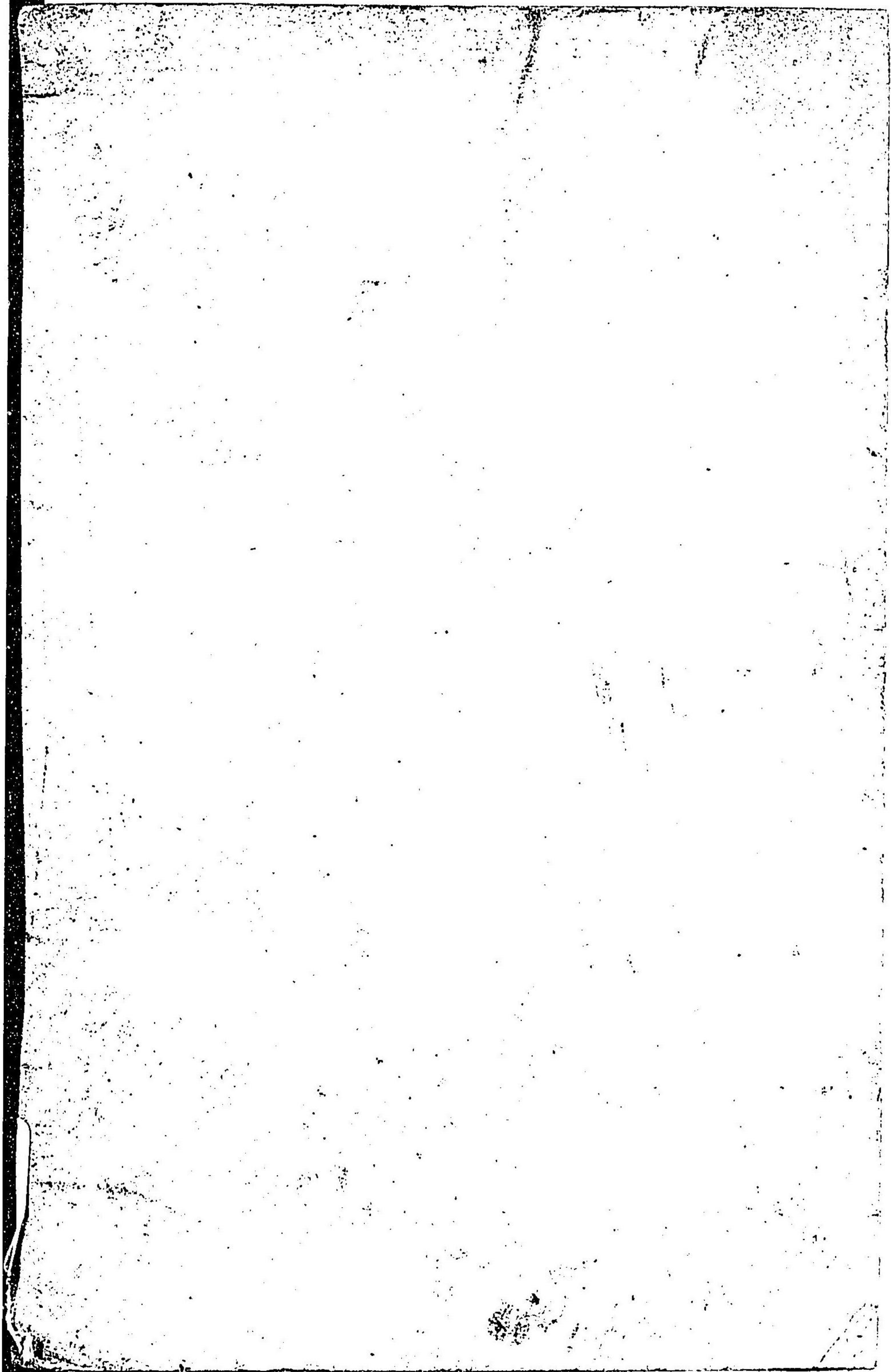
明治廿八年十月廿六日印刷
明治廿八年十一月一日出版

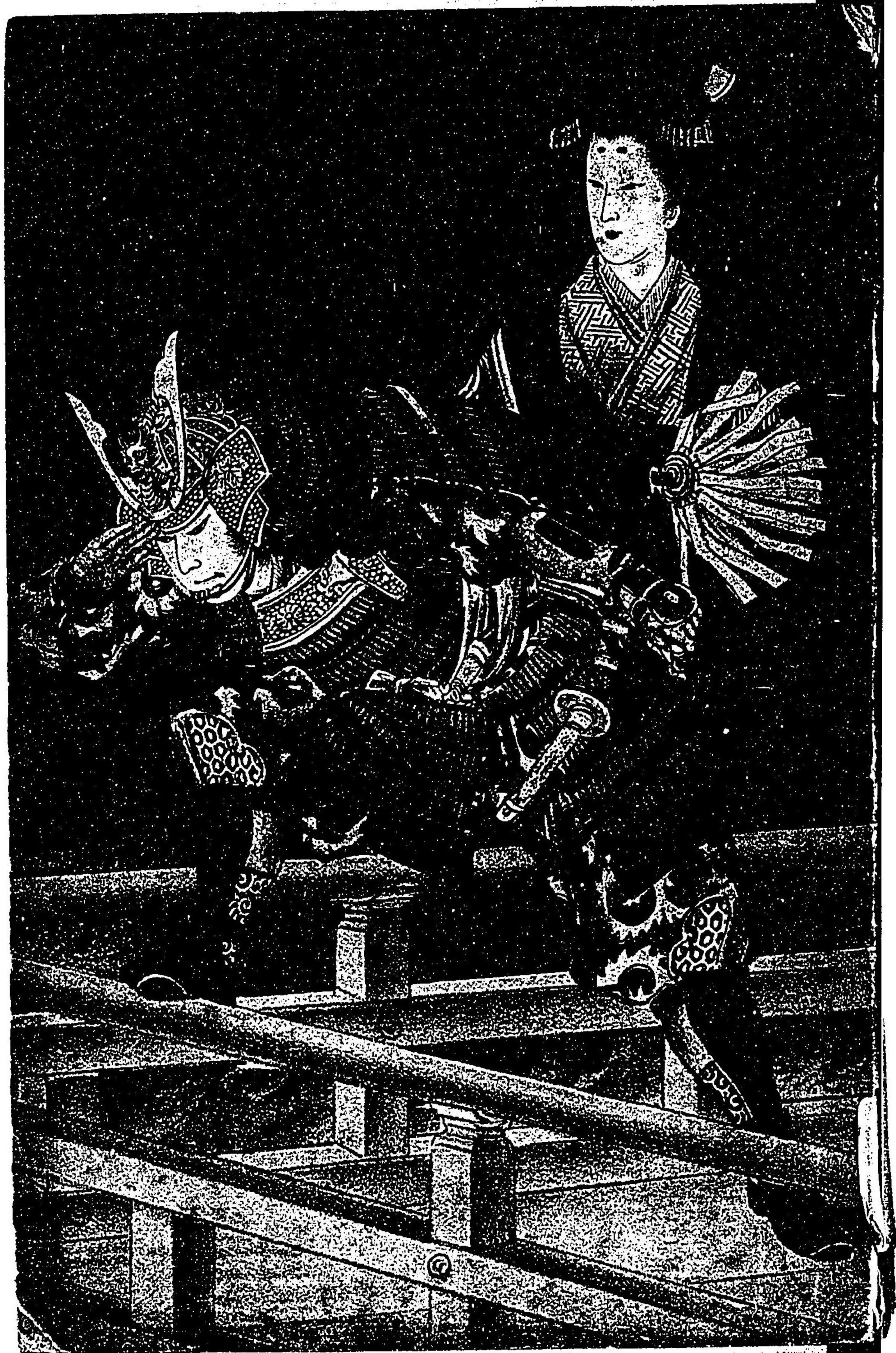
編輯者兼
岡本仙助
大阪市東區北久太郎町四丁目百廿八番屋敷

印刷者
南谷新七
大阪市南區鶴谷西之町百六十五番屋敷

發行所
岡本書店
大阪市東區北久太郎町四丁目百廿八番屋敷

發行所
岡本宇野
大阪市南區鹽町四丁目三番屋敷





091201-000-6

特10-121

難波戦記

岡本書店

M28

DBN-2049

